

シリーズ 私の一冊の本

看護学部 勝又里織 先生

流産・死産・新生児死で子をなくした親の会 著 『誕生死』
閲覧室 2 階 495.7/R99 三省堂

今回、「私の1冊」として、皆さんにご紹介したい本は、『誕生死』です。

私はかつて助産師として働いていたとき、家族や友人、看護師の友人からも、よく「産科は生命誕生の場だから、他の病棟と違って、明るい職場でいいわね。」と言われました。私自身、助産師として就職するまで、そのように思っていましたので、「妊娠出産=Happy なこと」と考えるのは、自然のことだと思います。おそらく、多くの方が、元気に赤ちゃんが誕生することが普通のことだと思っているでしょう。しかし、その一方で、流産や死産、新生児死などによって生まれた赤ちゃんを抱くことができない方がいらっしゃることを皆さんはご存知ですか？

近年、周産期の喪失を体験する方は、かつてに比べて減少傾向ではありますが、平成 21 年度にはおよそ 3 万人いらっしゃいました（厚生労働省統計）。この年の出生数は約 110 万人ですので、数値としては、一見、さほど多くないように見えるかもしれません。だからこそ、赤ちゃんを失うつらさを理解してもらうことができず、より気持ちの持っていく場がないこともあります。私は、妊娠出産というおめでたい場面の裏側にある「悲しみ」や「想い」を将来医療関係の職種に就く予定の学生さんにはもちろんのこと、他学部の学生さんをはじめ、多くの方々に知っていただきたいと思い、この本を取り上げることにいたしました。『誕生死』は、流産や死産、新生児死によりお子さんを亡くされたお母さまやお父さまが、そのときの体験をもとに、わが子に対する想いを綴っています。それと同時に、私たち医療関係者に対するご意見やご要望、友人や家族に対する率直な感情も書かれています。

私が臨床にいたとき、そこが大学病院だったこともあり、流産は日常的でしたし、年に何名かの死産分娩や新生児死がありました。そのすべてを自分が担当したわけではありませんが、10 年以上経った今でも気に掛かる方がいらっしゃいます。また、私は、1 年ほど前から、聖路加看護大学看護実践開発研究センター事業の 1 つである『天使の保護者ルカの会』にスタッフ研修生として参加するようになりました。そこには、流産・死産・新生児死を体験されたお母さまやお父さま、ときには家族の方が自分の体験や気持ちをお話しにいらっしゃいます。会は、年に 7~8 回行われていますが、体験者の方のお話を伺うたびに、臨床当時の自分の対応はよかったのか、もっとこうすべきだったのではないかと考えさせられます。そして、退院されたあとに、入院中とは別の多くの苦悩があることも知りました。そのようなこともあり、私は初めてこの本を読んだとき、身体の震えが止まりませんでした。なぜなら、自分のこれまでの看護に対する答えがそこに書かれているように感じたからです。

一般に、身近に赤ちゃんを亡くされた方がいらしたとき、なんと声をかけてよいのか分からないものです。誰もが赤ちゃんを亡くされた方を傷つけようと思って接してはいませんし、早く元気になることを願っていると思います。その結果、「まだ若いんだから次の子を作って」とか、「1 人子どもがいるのだからその子のために頑張らなきゃ」などと言ってしまいがちです。勇気づけるつもりで言った何気ない一言が、実は大きな傷を作ってしまう場合があります。お母さまやお父さまにとって、「上にいる子どもは上にいる子ども」ですし、「次の子どもは次の子ども」、「亡くなった子どもは亡くなった子ども」であり、どの子も 1 人のかけがえのないお子さんです。どのお子さんも、亡くなったお子さんの代わりになることはありません。それは、たとえこの世に生まれてくるのが出来なかったとしても、生まれてすぐに亡くなってしまったとしても、1 人の子どもであり、尊い命なのです。この本は、私たちにそれを教えてくれています。是非 1 度お読みいただければと思います。